



～阪神高速のある風景～
 第4回 阪神高速フォトコンテスト優秀写真

CONTENTS

エッセイ●季節の言葉

女王の黄金の糸 中田兼介

この出入口のこと知ってる?●阪神高速の出入口再発見!

1 なかの「中野」

13号東大阪線「中野出入口」

かつて御領地区では、水路が縦横に張り巡らされ、田舟に乗って家と田んぼを行き来していました

関西の名工

4 吉川雅彦さん(グローブ職人)

球界を支える高品質な野球グローブ
 百年前の職人魂は今も受け継がれている

教えてセンセイ

6 近藤 祥司さん(京都大学准教授)

日本の老化治療で取り組まないといけないのは寝たきり予防です

阪神高速の取り組み

8 阪神高速のETC利用履歴を、はやく手軽に確認できる

「ETC利用履歴提供サービス」
 (阪神高速すぐログ)を
 開始しました

ちょっと行ってみたい関西うまいもん

10 金山寺味噌 ●和歌山県有田郡湯浅町

Hanshin Highway TIMES

阪神高速道路株式会社は民営化20周年を迎えました
 12月10日は世界人権デーです
 民営化後の取り組みとお客さま満足度



表紙イラスト(御領せせらぎ水路)
 ヤマサキタツヤ:大阪生まれ大阪育ちのイラストレーター。読書やWebなど各媒体で活動。
 「来た見た食うた 大台南見聞録」(書肆侃侃房)など主に台湾に関する書籍を出版。

エッセイ 秋 季節の言葉

暑かった夏が過ぎると、田んぼが黄金色に染まる季節です。私たちの命をこれから一年支えてくれる稲穂はほどなく刈り取られ、映る景色から姿を消しますが、その頃から、もう一つのおぼろな黄金色が里に広がります。ジョロウグモの糸です。

ジョロウグモは、8本の長い脚に鮮やかな黄色と黒の縞模様、体はお腹側に赤、背中側は脚よりはくすんだ黄色と水色のやはり縞模様を纏い、このカラフルさで私たちの目を惹きつけます。といってもこれは成体のメスの話で、子グモは緑色が強いですし、オスは二回りほど小さく、色も茶色と地味で、自分では網を張らず、共食いを避けながらメスの網に

女王の黄金の糸

側には赤、背中側は脚よりはくすんだ黄色と水色のやはり縞模様を纏い、このカラフルさで私たちの目を惹きつけます。といってもこれは成体のメスの話で、子グモは緑色が強いですし、オスは二回りほど小さく、色も茶色と地味で、自分では網を張らず、共食いを避けながらメスの網に

同居します。

このクモは卵で冬を越し、孵化した子たちは春の遅くに現れ、糸ですでに小さな網を張りまわす。飛んでいる虫を捕まえエサにして、稲穂が色づく頃に成体になるのです。夏のクモが次第に減っていく中、冬の初めにかけて人里でたくさん見ることができ、皆さんの見ることができ、その堂々とした大きさもあり「秋の女王」と呼ばれています。

成体の網も半径50cmを越える立派なもので、下半分に張られた粘着性の横糸からなる捕獲面と、その前後に、襲ってくる天敵を防ぐよう働くバリアー部を持つのがユニークな特徴です。この網、夏の間は白い糸で作られています。それ

が秋になって大人になったメスが黄色い糸を紡ぎ始め、できた網は陽の光を浴びて、そこで黄金色に輝くようになるのです。なぜ秋になると色が変わるのか。はっきりしたことはまだわかっていませんが、一つの説が、エサをたくさん捕まえられるようにというものです。ハチなど、花粉と同じ黄色いものに近づくと習性を持つ昆虫は多く、黄金色の網はそんな虫たちをおびき寄せているのだ、という。

人の世では、黄金色は豊かさや実りを象徴するのだそうです。それはジョロウグモのメスにとっても同じかもしれません。卵をかかえてお腹をはち切れんばかりに膨らませた彼女たちが、黄金色の網の上でエサを待っている姿を見ると、ついそう思ってしまう。

13号東大阪線・中野出入口から北へ約5km、大東市御領地区周辺は、その昔、水路が村の中を縦横に走る水郷地帯でした。水路の多くは姿を消しましたが、その一部である「御領せせらぎ水路」が名残を今に伝えます。「御領せせらぎ水路保存会」の頼尊久雄さんと辻本好さん、大東市産業・文化庁生涯学習課に聞きました。

どの家の前にも水路が通っていた

中田兼介 なかたけんすけ(京都女子大学教授)

1967年大阪生まれ。博士(理学)。専門は動物行動学・生態学。現在日本動物行動学会会長かつ日本蜘蛛学会会長。著書に「クモのイト」「もえる!いぎものりくつ」(いずれもミシマ社)など

この出入口のこと知ってる?

阪神高速の出入口再発見!

なかの「中野」

13号東大阪線「中野出入口」



水郷地帯だった往時の面影を色濃く残す「御領せせらぎ水路」。鯉が泳ぎ、水路沿いには、昔ながらの家屋が並ぶ。写真奥に見える御領橋によって南北に結ばれる道を除けば、現在の御領地区に走る道のほとんどがかつては水路だった。道といえは、幅3〜4mの水路の横にある幅50cm〜1mのあせ道だけだったと語る御領せせらぎ水路保存会のみなさん。

かつて御領地区では、水路が縦横に張り巡らされ、田舟に乗って家と田んぼを行き来していました

御領地区は、標高1m50cmほどの低湿地帯です。時を縄文時代まで遡れば、海が生駒山系の山裾まで広がっており、その後、長い長い年月を経て淀川や大和川から流入する土砂の堆積により水域が狭くなり、深野池という池になりました。深野池の西側の御領では、鎌倉時代に集落ができたことが発掘調査によりわかっています。江戸時代中期の宝永元年(1704)には、治水対策として大和川の付け替え工事が行われます。水の流入がなくなった深野池の跡地などでは新田開発が行われ、農地や集落の拡大につれて水路が数多くつくられてきたようです。

では、現在70歳代の私たちの子供時代の御領村のお話をしましょう。昭和30年代前半当時、御領では村中に水路が張り巡らされていました。私たちの親や祖父、曾祖父の時代の明治・大正の頃の御領村も、同様に水路のある風景が広がっていたと聞いています。まさに網の目のようにどの家の前にも水路が通っていて、底板一枚と